

8回目の共生のひろば

岩槻邦男（兵庫県立人と自然の博物館 館長）



「共生のひろば」も8回目と歴史を重ねてきました。企画しているひとにはくにとっても、20年の歴史のうち8年にわたってこの事業を育ててきたこととなります。ひとにはくでは活動の柱のひとつに、連携グループや連携研究員と協働した活動を構築し、その成果を公表することをあげています。だからといって、調査研究活動に専従しているわけでもない人たちに特化した発表会を企画することなど、最初は、風車に向かって突進するドンキホーテのような意気込みが求められたのかもしれませんが。

「共生のひろば」は、しかし、その第1回からいい成果をあげ続けています。その成果は、毎回きっちりまとめてきた報告書からも読み取れると自負します。継続は力なり、といいながら、外からはそうと見えていない無理な操作が入ったことだっけなきにしもあらずでした。そんな歴史を考えながら、「8回目の共生のひろば」に参加しました。もちろん、わたしも、第1回からひとときの休みもなく口頭発表を聞かせてもらい、ポスターを見せてもらっています。

「ひろば8」には、キッズや小学生、中学生が主体となる報告はありませんでしたが、高校生のいくつかのグループがいい報告をしました。話題も広い範囲に及び、口頭発表など、ついていくために頭の切り替えを頻繁に繰り返す必要がありました。8回目の特徴は、この企画が順調に発展していることを示してくれたかもしれません。

キッズや小学生は、調査研究といっても、データをもとに論じる発表にはふさわしくありませんので、最初の頃に活発に見られた参画の姿勢が少し後退したかもしれません。しかし、自然界の諸々の事象への好奇心は幼年期から始まるものですし、その好奇心を幼いころのうちで熟成することは、知的な動物である人の健全な成長にとって素晴らしい宝になるはずで、取り出されたデータで勝負するだけではなくて、幼いころが自然界の不思議にどう感応し、それをどのように知的に処理していくのか、ひとにはくが取り組み始めたキッズプロジェクトがそれを支援するのにどのような成果を導き出してくれるのか、今後の展開を刮目して待ちたいところです。「共生のひろば」が学会発表やイベントの報告会と違うところは、連携する人たちと継続的に積み上げる協働の成果を報告し、さまざまな共同体との間の情報交流を促進するところにあります。

高校生の参加の活性化は博学協働の成果の表れでもあるのでしょうか。わたし自身、母校の柏原高校の生物班での活動が生涯の植物学への取り組みの出発点になったことを思い出します。一時代前には、高校のクラブ活動も活発で、わたしも柏原高校生物班の機関誌 **NATURA** に報告文を掲載しております。

高校生の発表は、下手をするとクラブ活動の報告で終わってしまいます。しかし、「ひろば8」における高校生の発表は、宿題のまとめの報告会と違って、独創的な取り組みも盛り込まれており、活動の内容と成果を楽しく聞けるものでした。ひとつは、地域の人たちとの交流が問題提起を促し、それに丁寧に対応した成果が発表の素材になっていたものなどがあつたからでしょう。調査研究が、科学的好奇心の発展として展開するのが科学の正道ですが、身近な話題や要求に可能な範囲で真摯に対応するのも科学のもうひとつの大切な役割です。それは最前線の科学者が果たす成果を期待するものですが、高校生が対応できる部分だつてさまざまにあるはずで、そのいくつかは「ひろば8」で語られたのでした。

ひとはくと連携した活動が発表の中心になりますので、発表者も年度を重ねると重複することになります。昨年の発表以来過去1年の間にどのような展開が見られたかが聞けるのも楽しいことですが、連携の拡大という観点からは、新しい顔ぶれが増えるのが好ましいともいえます。限られた時間帯での発表ですから、口頭発表に参加していただける件数は限られていますが、ベテランの発表と新規参入の発表がよいバランスをとれるようであればこの事業の将来には洋々たるものがあることでしょう。「ひろば8」はその意味でもいい展開を見たものでした。

ポスターにもいろいろ工夫が見られました。ポスターだからといって、図表が張り付けられるだけでなく、表現法にさまざまな工夫が施されているのも、それぞれの意欲が感じ取られ、楽しく見せてもらえることでした。さらに、発表時間帯に、自分たちの成果をよりよく知ってもらおうと、積極的に説明する姿勢が見られたことも、単に図表で発表に参加するというだけでなく、成果をより広く共有したいという熱意の表れであろうかと思わせてもらいました。ひとはくでも、上から目線のような伝統的な展示だけでなく、学びへの意欲を誘う立体的な演示の展開を考え、実行しようとしています。その影がひろばにも映し出されているのかと思ひさせられたことでした。

「共生のひろば」は他では見ない試みで、ひとはくの活動が博物館という既存の機構に閉じられていないことを表現するものとなっています。それだけに、この発表会の個々の事例を評価する作業は困難を極めます。具体的にいえば、毎年、いくつかの賞を設定し、そのための選考をする作業の難しさにもそれは表われています。幸い、「ひろば8」の場合は、顕彰者の選定について、結論はすんなり出せました。選考方法も、さまざまな試みを積み上げてきて、それなりに落ち着いてきたからかもしれません。

口頭発表の場合、何度も経験した人が、まとめ方でも発表の進め方でも、手慣れたうまさを出揮できるのはある意味では当然です。同じ顔ぶれが連続して受賞するのは避けた方がいいと、選考に当たってもらった人たちが自然に思っていることでもあったようです。評価は、何人かが担当して点数で評価したデータをもとに、選考委員が総合的に判断して最終結論を出します。議論の結果、点数が高くても顕彰されない場合が出てきます。これは、出てきた数字に敬意を払いながら、それでも絶対的な権威とはしないという「共生のひろば」風の理解といえるのでしょうか。世間では、評価で数字が独り歩きすることが多くなってきたようです。しかし、これはとんでもない落とし穴に落ち込む危険性ははらんでいます。そして、その結果としての顕彰は、「ひろば8」ではどのように受け取られたのでしょうか。顕彰された報告は、今回最高だったというのではなく、その顕彰が今後の「共生のひろば」の発展にどのように寄与するかも計算に入っていたはずで。

この講評では「ひろば8」そのものについていい点をつけ過ぎかもしれません。しかし、今回も

意欲的に発表に参画して下さいました人たち、寒い1日を発表会に参加して熱心に報告を聞いて下さった人たち、それに、引き続いて公開しているポスターを見て何かを学んで下さる人たちの熱い視線を受け、ひとはくのこの事業が今年もまた力強い一歩を運んだことを感謝しながら振り返ることであります。来年もまた2月11日にはたくさんの人たちがひとはくに参集して下さいることを期待し、そのための準備が今から始まるようにと呼びかけさせていただきます、お礼の言葉を前向きに閉じさせていただきます。

